

韓国家族と女性

—1960年代以降の状況を中心に—

澤野 美智子
神戸大学大学院国際文化学研究科 博士課程

緒言

これまでの人類学的研究においては、韓国の家族は儒教思想と一体となった父系の血縁関係によって規定されている、と説明されてきた¹⁾。1960年代以降の産業化・都市化に伴う社会的変化を指摘するものでさえ、韓国の家族が儒教的な行動規範を堅持していることを主張している²⁾。社会学・女性学分野の研究には、韓国における儒教的行動規範の弱体化を指摘するものも見られる³⁾。しかしこれらはいずれも表面的な分析に留まっている。従来の方法では、現代韓国の家族をめぐる状況を説明できなくなっており、新たな視点からの分析が必要とされている。

近年、婚姻形態の変化に注目し、法制度と人びとの実践・認識の間に乖離があることを指摘する研究もなされてきている⁴⁾。このような研究は緻密なデータ分析を通して婚姻形態の変化を提示している点で評価できる。しかしその変化が韓国の家族のあり方においてどのような

意味を持つのかなど、家族のあり方そのものの変化については言及されていない。本研究は、女性と生家および婚家との関係に注目する視点から、婚姻や出産に関連する変化を明らかにする。この作業を通して、韓国の家族の変化について捉えなおす。

研究方法

本研究のフィールドワークは2010年9月から2011年6月にかけて、韓国全羅北道S郡K村を中心に行なった。インタビューはK村住民のうち、1930年代から1980年代に結婚した、現在50歳代以上の女性を対象とした。インタビュー対象者の概要は次のとおりである(表1、結婚年順、年齢は数え年)。

本研究の成果

1. 結婚式および結婚に関連する儀礼

K村の住民たちは結婚式を指すとき、「旧式結婚式

表1 インタビュー対象者の概要

対象者	現在年齢(歳)	結婚年齢(歳)	結婚年(年)
A	92	17	1936
B	86	16	1941
C	83	14	1942
D	80	16	1947
E	79	18	1950
F	78	17	1950
G	75	15	1951
H	75	17	1953
I	75	17	1953
J	74	19	1956
K	71	17	1957
L	73	20	1958
M	73	20	1958
N	71	21	1961
O	67	21	1965
P	64	19	1966
Q	64	21	1968
R	55	26	1982
S	56	27	1983

(*gusik-geolhonsik*)と「新式結婚式(*sinsik-geolhonsik*)」の2種類を区別する。「旧式結婚式」とは、韓服で正装した新郎新婦が拝礼を交わし盃を交換する結婚式のことである。また「新式結婚式」とは、主に結婚式場や教会において、キリスト教式などの方法で進められる結婚式のことである⁵⁾。K村のインタビュー対象者のうち50歳代のR、Sの2名は「新式結婚式」を、60歳代以上の17名は「旧式結婚式」を行なっている。結婚式を挙げた場所は、「旧式結婚式」を挙げた人のうちE、F、Hは婚家(*si-jib*)、それ以外の14名は生家(*ch'injeong-jib*)である。婚家で結婚式を挙げた理由としてEは「同じ村の人と結婚したから」、Fは「普通は生家に新郎を招待して結婚式を挙げるけれど貧しい人は新郎の家に行って式を挙げたのよ」と言う。「旧式結婚式」は特別な理由がない限り原則として生家で行なうものであると認識されている。「新式結婚式」を挙げた人はすべて結婚式場で式を挙げている。

結婚式のときに利用する移動手段も変化している。「旧式結婚式」を行なった17名のうち12名が籠(*gama*)に乗って移動し、他の5名は徒歩(G、N、Q)、乗用車(B)、タクシー(M)であった。中でもBは当時珍しかった乗用車に乗って嫁に来たことが自慢であり、何度も得意げに話した。「新式結婚式」を挙げた2人は乗用車やタクシーを利用している。筆者がSに「籠に乗らなかったのですか」と聞くと、Sは「私がいつの時代に結婚式を挙げたと思っているの」と言い、籠に乗るのは古い方法だという態度を示した。重要なのは移動手段の変化だけでなく、乗物に乗っている間の行為の変化である。「新式結婚式」を挙げ車で嫁に来た2名は車内で泣くようなことはなかったのに対し、籠に乗ったほぼ全員が籠の中で「おかあさん、おかあさん」と大きな声をあげて泣いたという。徒歩で嫁に来たNは「籠に乗らなかったからそんなに大声では泣かなかった」と語っており、籠に乗ることと泣くことは同伴するものとして考えられている。嫁に行く娘が泣かなければ親が恥ずかしい思いをする(娘が親元を離れるのに悲しがらないほど親子関係がよくないと見なされる)という暗黙の規範が存在したが、近所の目を気にして無理に泣こうとしなくても、親元を離れる寂しさや老いた親への気がかりから自然に泣けてきたという。

結婚式に際しての同行者としては、「旧式結婚式」で新郎が新婦の家に向かうときは新郎の父親や父方オジラ2～3名程度がつきそった。女性がつきそってくること

はなかったという。新婦の家で結婚式を挙げたのち、新婦が新郎の家へ向かうときは、新婦の父親や父方オジラ2～3名程度がつきそった。このときもつきそってくるのは男性であり、女性がつきそうことはなかった。しかし「新式結婚式」では、両家の親族一同が結婚式場に集まるようになった。そのため結婚写真を見ると、「旧式結婚式」の写真では新婦の親族が参列者の大部分を占めているのに対し、「新式結婚式」の写真では両家の親族が同人数程度ずつ参列している。なお、現在も結婚式のスタイルのひとつとして「旧式結婚式」を挙げるケースがあるが、その多くは結婚式場で開かれ、両家の親族が参列する。

結婚に関連する儀礼の中でも変化が著しいのは、サルベギ(*salbegi*)とクンチン(*geunchin*)である。K村住民たちの説明によればサルベギとは、嫁に来て4日後に生家へ戻り、生家で4日間過ごしてから婚家に戻る慣行のことである。またクンチンとは、嫁に来て約1年後に生家に戻り、生家で約1年間過ごしてから婚家に戻る慣行のことである。サルベギおよびクンチンに際して婚家から生家へ向かうときは新郎と姑が、サルベギやクンチンを終えて生家から婚家へ戻るときは実母が新婦につきそうのが一般的であり、「イバジ(*ibaji*)」と呼ばれる贈り物(主に餅など)を携えて行ったという。

K村のインタビュー対象者の場合、サルベギに関しては「旧式結婚式」を挙げた人のうち4名(C、D、F、G)を省く全員が行なっている。そのほとんどが結婚式後3～4日を婚家で過ごした後で生家に戻り、生家で3～4日過ごしている。サルベギを行わなかった人たちにその理由を聞くと、「旧式結婚式」を挙げた人たちの場合は「結婚式の翌日に生家の家族が中国へ引っ越してしまったから」(D)、「貧しかったから」(F)、「結婚当初から生家で暮らし、婚家はとても遠かったから」(G)などという事情が存在した。しかし「新式結婚式」を挙げた人たちの場合、サルベギを行なった人はいないものの、そこに特別な事情があったわけではなく「新式結婚式だからサルベギはせず新婚旅行に行った」と言い、旅行先としては韓国内の観光地を挙げている。また「旧式結婚式」を挙げてサルベギを行なった人たちの中でも比較的若い世代(O、P)は、姑や実母が同行することなく新郎新婦だけで行ったと語っており、サルベギから新婚旅行への過渡期の状況として興味深い。

クンチンに関しては、実施したのはA、B、C、F、J、L、Oであり、結婚年がさかのぼるほど実施率が高くなっ

ている。結婚からクンチンまでの期間としては実施した全員が1年と答えた。クンチンで生家に滞在した期間としては1ヶ月、3～4か月、1年とばらつきが見られるが、1年未満の人たちも「本当は1年するはずだけど」やむをえない事情のために期間が短くなったと答えた。その事情としては、「1日でも長く(生家に)いたかったのに姑が戻って来いと言ったから」(A)、「(婚家が)貧しくて働かなければならなかったから」(L)などである。なお「新式結婚式」を挙げた人たちはいずれもクンチンを行っていない。

2. 出産と子どもの名付け

出産と子どもの名付けを通して、女性と婚家および生家との関係が変化している様子がうかがえる。約40年前までは子どもを婚家で生むのが当然と考えられ、多くの場合は姑が出産の介助をしていた。インタビュー対象者のJは、妊娠中にクンチンで生家に戻ったが、出産が差し迫ったのでクンチンを早く切り上げて婚家に戻り、婚家に戻った翌日に出産した。舅と姑に対して、クンチンから戻った挨拶をするとき、大きなお腹でお辞儀(*jeol*)をするのはたいへんだったという。生家で子どもを生んではいけなかったのかと聞いた筆者に対しJは、「婚家の子どもは婚家で生まなくてはいけなかったのよ」と答えた。子どもの中でも特に家系を継ぐ息子を望む傾向が強く、娘を産むと姑に小言を言われたり、夫や周囲の人たちに対して申し訳なさや恥ずかしさを感じたりしなければならなかった。

娘ばかりを続けて3人産んだのち息子を2人産んだOは次のように語っている。

「(3番目の娘が生まれたとき) 恥ずかしくて泣き続けて、顔が腫れ上がったわ。夫は、泣かないで、とってくれたけれど。内心、残念だった。娘ばかり3人も生んだ女と指をさされる気がした。お寺に通って、息子を一人でもいいから授けてくださいと祈ったわ。占い師(*saju-jeng-i*) のところにも行って、決められた日に避妊をしなかった。そしたら息子に恵まれたの。息子が生まれたときは、この世のものが何も見えないくらいの気持ちだった。他にうらやましいものも何もない。万事が楽になった。娘しかいないときは後ろ指をさされるような気持ちで過ごしていたのに」。

一方、50歳代のRとSは病院で子どもを出産した。Sは最初の出産で娘を産んだものの、「病院で産んだから姑が小言を言うこともなかった」と語った。Rは娘1

人だけを産んだが、つわりがとてもしどかったため、夫も周囲の人たちもそれを理解して、子どもはこれ以上生まなくていいと言ってくれたという。

産後の療養に関しては、婚家で出産した場合は姑が食事の支度をしてくれたものの、姑に対する気がねと農作業の忙しさから、長期間休むことは困難であった。通常は産後3日ほどで床を離れて働き始めたという。しかし50歳代のRとSの場合、実の姉妹が産後の療養に関わっている。Rの場合、病院で出産したのち実の妹が2日間手伝いに来て、食事の支度をしたり子どもを風呂に入れたりしてくれた。Sの場合、病院で出産したのち生家で療養し、実の姉が1ヶ月ほど手伝いに来てくれたという。かつては子どもを婚家で生まなければならず産後の療養もほとんどできなかった状況から、病院で生んで産後は生家で療養する状況へと変化していったと言える。

子どもの名付けに関しては、上の世代ほど舅が単独で担当するケース(A、D、E)が目立つ。しかし世代が進むにつれて変化が見られる。70歳代前半の女性たちの場合、舅と夫が名付けたり(M)、長男は舅が名付け残りの子どもたちは夫が名付けたり(J)、息子たちは夫の兄が名付け娘たちは女性(インタビュー対象者本人)の兄弟が名付けたり(L)するケースが現れる。また夫が単独で名付けるケースも徐々に増え始め(H、I、N、O、S)、女性(インタビュー対象者本人)とその夫で名付けたり(Q)、女性(インタビュー対象者本人)が漢字字典を見ながら名付けたり(R)するケースも出てくる。子どもの父方祖父が名前の決定権を握っていた状況から、子どもの父親や母親へと決定権が移行してゆく様子がうかがえる。

考 察

結婚式および結婚に関連する儀礼の変化を通して、新郎側の家と新婦側の家の役割の平等化が進行してきたことがわかる。また出産や子どもの名付けにおいては、子どもを婚家のもので管理する状況から、夫婦が主体となる傾向への移行が見られる。さらに、かつては娘の出産および子どもに対する干渉を行わなかった生家も、娘の産後の療養などにおいて重要な役割を担うようになってきている。これらの変化から、夫婦がより多くの決定権を持つようになり、既婚女性が婚家から干渉を受ける度合いが相対的に低下してきたこと、反対に生家との関わり方が密になってきたことが指摘できる。

要 約

本研究は、これまで儒教規範や父系血縁の原理で説明されてきた韓国の家族の変化について、女性と生家および婚家との関係に注目する視点から捉えなおした。韓国農村において長期のフィールドワークを行ない、婚姻や出産に関連する変化を明らかにした。このデータを通して、女性が婚家から干渉を受ける度合いが相対的に低下してきたこと、反対に生家との関わり方が密になってきたことを指摘した。

謝 辞

本研究の遂行にあたり、平成 22 年度公益財団法人三島海雲記念財団学術奨励金による助成を賜りました。末尾ながら、ここに記して深く感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 李光奎：韓国家族の構造分析，一志社，1975。（韓国語）。
- 2) 伊藤亜人：東洋文化研究，53，147-160，1973。
- 3) 女性韓国社会研究会（編）：韓国家族文化の今日と明日，社会文化研究所，2006。（韓国語）。
- 4) 宮原葉子：韓国朝鮮の文化と社会，8，146-175，2009。
- 5) 伊藤亜人：朝鮮を知る事典（伊藤亜人・大村益夫・梶村秀樹・武田幸男・高崎宗司監修），p.150，平凡社，2003。